

医学と宗教はどこで出会うのか

——現代医学における宗教の意義——

杉岡良彦

(1) 医学の特徴 物理学や生物学などと異なり、医学は様々な自然科学や人文社会科学を包含しながら、なおかつ「病む人を治す」という実践が伴う。よって、「宗教と科学」というテーマの中では、別途に論じなければならない特別な位置を占める。医学はその目的から、治療医学、予防医学、健康増進医学に分類されるが、近年予防医学や健康が大きなテーマになっている。これは宗教と医学の対話を促す要因の一つとなる。

(2) 宗教と健康に関わる科学的証明 最近の医学の方法論が生物医学による分子生物学中心の方法論に加えて、EBMの基礎となる臨床疫学を重要な方法論としており、これによって、宗教と医学の研究が今後ますます増える可能性がある。臨床疫学に基づく研究結果は、「宗教に熱心な人では、うつ病になってもその回復が宗教に熱心でない人に比べて早いこと」、「礼拝出席や聖書講読を定期的に行う人ではアルコール依存や喫煙が少ないこと」、「定期的に礼拝に出席する人は、そうでない人よりも長生である」など多岐にわたる。ただし、宗教と健康に関わるこれまでの研究はあくまでも既知のメカニズムを紹介して可能となるとされる。つまり、ルルドの泉の奇跡認定とは異なり、心身医学やその基礎となる精神神経免疫学が明らかに

してきたように、宗教は心理的経路、社会的経路、行動的経路という三つの経路を介して心身の健康にも影響を与えるとされる。

(3) 研究結果の解釈——キリスト教学への問題提起——

① 医学における神の位置——ギャップの神を超えて—— ドーキンはじめ、科学における神の否定の理由は、科学者が「ギャップの神」概念に基づくことが少なくない。医学においても奇跡を介してのみ語られる神は、医学における「ギャップの神」である。しかし、今回紹介した研究では、既知のメカニズムを紹介することが仮説として示されており、新しい医学研究結果もギャップの神の不十分さを告げる。神を求め、神に感謝し、自らの人生に深く神が関わる人に、結果的に、より多くの健康がもたらされるのであるとすれば、まさしくその点にこそ、神の働き（恩恵）を見出すことが可能と言えるのではないか。

② 生の次元論あるいは次元的人間論の必要性 フランクルは、人間を「身体的・心理的・精神的な統一にして全体」と考える。そして、次元間の存在論的差異と統一を主張する人間論を次元的人間論と呼んだ。フランクルでは精神的次元の主体的能動的働きが強調され、人間は「生きる意味」を求める存在であるとし、精神的次元を介して神へと開かれた人間観を提示する。同様に、ティリツヒは人間における物理的、化学的、生物学的、心理的、精神的、歴史的次元（次元というメタファー）を区別しつつも、人間を多元的な統一体であるとする。そして諸次元の「相互内在性」を指摘する。こうした生の次元論あるいは次元的人間論によって、宗教が心身の健康に影響を及ぼす

パネル

という科学的研究結果への接点を見出すことが可能となる。つまり宗教は、精神的あるいはスピリチュアルな次元を介して、心身に影響を与える。これは、宗教的救いが身体的救い(Healing)を無視できないことを示す。スピリチュアルな次元の根拠はイマゴ・デイという概念に基づく。

③救いにおける健康や身体的位置 「救済」は宗教と医学の実現すべき同じ目標であり、両者の関係が本来非常に密接であることがわかる。テイリツヒは、「イエスは、何はさておき癒しを行う者である」、「イエスにおいて、宗教的なものと医学的なものとの一致を最も鮮明に示している」と指摘する。医学研究が、宗教と健康の問題を明らかにしつつある現在、キリスト教は救済の文脈の中で肉体の救済がどのような意味を持つのか、心身の健康の問題はどのように議論され、位置づけられるのかを明らかにする必要がある。

パネルの主旨とまとめ

芦名定道

キリスト教思想は、ポスト近代の思想的状況下において、多様な動向を示している。その中で、とくに顕著なものの一つが、「キリスト教と自然科学」をめぐる議論であり、とくに欧米のキリスト教研究において言えば、マクグラス、クレイトン、カブ、マクフェイグなど英語圏の神学者からパネンベル

ク、モルトマンらのドイツ語圏の神学者まで、その広がりにはキリスト教思想の広範な領域に及んでいる。これは、キリスト教思想で、伝統的に「自然神学」と呼ばれる思想領域に関わる問題であるが、伝統的で古典的な自然神学を踏まえつつも、現在のポスト近代の知的状況に即した自然神学の再構築が世界的広がりにおいて求められているということを意味している。実際、一九世紀～二一世紀にかけて、自然神学の問題領域は、天文学や物理学から、生命科学(進化論を含む)、心理学、そして脳神経科学へと大きく拡張し、その学的基础の再検討なしには、今後のキリスト教思想の積極的な展開は期待できない。また、こうしたキリスト教思想が直面しつつある問題状況(科学技術時代の宗教という事態)は、二一世紀の宗教思想研究全般にとっても、共有可能な、また避けて通れないものと思われる。

本パネルは、以上の問題状況を前提に企画された。各パネルストにはそれぞれ独自の視点から発表いただいたが、パネル全体としては、日本におけるキリスト教思想研究の新たな可能性を展望することが目指された。まず濱崎雅孝氏には、「科学と神学の対話」をめぐる現代キリスト教神学の問題状況を確認した上でパネル全体の議論の方向付けをお願いし、続く落合仁司氏には、キリスト教思想と科学の関わりを論じる際に、その基礎となる「数学」の役割について議論いただいた。こうした理論的基礎論に対して、金承哲氏には、生命科学(とくにクロールン技術など)の進展がキリスト教神学にいかなる問いを突きつけているのか、杉岡良彦氏には、現代医学の問題状況で、宗教